

原著

平成 25 年度 日本社会薬学会九州支部設立記念講演会・第一薬科大学薬剤師生涯学習講演会参加者アンケートの解析

第一薬科大学 臨床薬学講座 1) 社会薬学分野, 2) 実務実習教育センター, 3) 臨床薬剤学分野, 4) 熊本大学大学院 生命科学研究部 薬剤情報分析学分野

小武家 優子¹⁾, 湯川 栄二²⁾, 入倉 充³⁾, 下園 拓郎²⁾, 飯盛 恵美子²⁾, 大光 正男²⁾, 安藤 伸一郎²⁾, 廣村 信³⁾, 山元 誉子³⁾, 入江 徹美⁴⁾, 吉武 毅人¹⁾

Analysis of questionnaire survey of participants in lecture meeting of lifelong learning for pharmacist, co-hosted by Daiichi University and Japanese Society of Social Pharmacy, Kyushu Branch in 2013

Yuko KOBUKE¹⁾, Eiji YUKAWA²⁾, Mitsuru IRIKURA³⁾, Takuro SHIMOZONO²⁾, Emiko IIMORI²⁾, Masao OHMITSU²⁾, Shinichiro ANDO²⁾, Makoto HIROMURA³⁾, Yasuko YAMAMOTO³⁾, Tetsumi IRIE⁴⁾, Taketo YOSHITAKE¹⁾

¹⁾Laboratory of Social Pharmacy, ²⁾Center for Education of Clinical Pharmacy, ³⁾Laboratory of Evidence-Based Pharmacotherapy, Department of Clinical Pharmacy, Daiichi University of Pharmacy, 22-1, Tamagawa-machi, Minami-ku, Fukuoka, 815-8511, Japan

⁴⁾Department of Clinical Chemistry and Informatics, Faculty of Medical and Pharmaceutical Sciences, Kumamoto University, 5-1, Oe-honmachi, Kumamoto, 862-0973, Japan

Corresponding Author

Tel: 092-541-0161. Fax: 092-553-5698. E-mail: y-kobuke@daiichi-cps.ac.jp

Abstract

It is said that pharmacists need to continue to learn throughout life. Lecture meeting of lifelong learning for pharmacist, co-hosted by Daiichi University and Japanese Society of Social Pharmacy, Kyushu Branch, was held on July 7, 2013. The topics of this meeting was the role of pharmacist in community medicine.

The purpose of this study is to clarify awareness to this meeting and to use data as a basis of this meeting from now. Questionnaire survey for this meeting was carried out. Results of this study showed that most participants regard this meeting as meaningful. It is thought that Daiichi University would keep to provide pharmacists with this meeting about topics according to needs of pharmacists..

Keywords—pharmacist; lifelong learning; lecture meeting; community medicine;
Japanese Society of Social Pharmacy, Kyushu Branch

諸言

薬剤師倫理規定(平成9年10月 日本薬剤師会改訂)において、第4条(生涯研鑽)「薬剤師は、生涯にわたり高い知識と技能の水準を維持するよう積極的に研鑽するとともに、先人の業績を顕彰し、後進の育成に努める。」と規定されている¹⁾。公益社団法人 日本薬剤師会においては、学習を記録する「ポートフォリオシステム」と、ポートフォリオに書くことのできる学習手段の一つとして提供する「e-ラーニングシステム」の2つのシステムにより構成される生涯学習支援システム「JPALS」がスタートし、薬剤師が体系的、計画的に生涯学習を進めるよう提供されている²⁾。

本学では薬剤師の生涯教育の一環として卒後教育を行ってきたが、1993(平成5)年度からは本学主催の公開講座(リカレントセミナー)として、地域所在の薬剤師および一般市民にも開放し、年1回の開催を実施している。

一方、日本社会薬学会³⁾は、1981年12月に「社会薬学研究会」として発足し、2000年に「日本社会薬学会」と名称を変更、2008年には日本学術会議の協力学術研究団体の称号を付与されている。2011年に東京大学安田講堂で行われた第30年会の中で、早瀬幸俊・日本社会薬学会第3代会長は、社会薬学分野の教育研究の充実と、病院・保険薬局薬剤師の学術活動のバックアップを目標とした学会活動の活性化を提議し、そのための「全国各地の支部設置」と「会員数の増加」の必要性を強く訴えた。そして、九州唯一の社会薬学研究室として、本学の社会薬学分野に、九州支部の設立が依頼された。

これを受けて、同年11月に九州在住の学会会員16名に、支部設立の是非を問うたところ、全員から賛同が得られ、また支部長就任を、熊本大学の入江徹美教授に快諾いただいた。その後、支部の設立趣意書⁴⁾を作成し、賛同者名簿とともに、学会事務局へ提出し、2012年1月10日の常任幹事会において、4番目の支部として九州支部の設置が承認された。初代支部長として、熊本大学大学院医学薬学研究部の入江徹美教授が、そして事務局長として、本学社会薬学分野の吉武毅人教授が就任し、本学の社会薬学分野が支部の事務局となった。同年7月に熊本大学で開催された「支部会員の集い」で、本学において設立記念講演会を開催することが決議され、入江支部長より本学の薬剤師生涯学習講演会との共催が依頼された。こうして、2013年7月7日に、「平成25年度 日本社会薬学会九州支部設立記念講演会・第一薬科大学薬剤師生涯学習講演会」(以下、本講演会)が、「地域医療における薬剤師の役割」をテーマとして開催された〔図1〕。なお、本講演会の講演会プログラム〔資料1〕と発表抄録〔資料2〕を、付属資料として掲載している。

本研究の目的は、本講演会の参加者(学生を除く)を対象に、講演会に関してアンケート調査を実施し、解析することによって、今後の第一薬科大学生涯学習講演会並びに日本社会薬学会九州支部講演会開催の基礎資料とすることである。



図1 平成25年度 日本社会薬学会九州支部設立記念講演会・第一薬科大学薬剤師生涯学習講演会
(総合討論にて演者手前より：川添先生、中村先生、神村先生)

方法

2013年7月7日(日)開催の本講演会に参加した138名から、学生を除く一般受付106名のうち回答を得た66名(回答率62.3%)を対象とした。

方法は、自記式質問紙〔図2〕にて調査を実施した。調査項目は、属性(性別、年代、所属)、講演会を知った参加経緯、本講演会に対する有意義評価、本講演会の意見・今後の講演会希望テーマについての意見に関する自由記載である。

解析は、年代別、所属別にクロス集計を行った。

なお、本研究は、第一薬科大学臨床研究倫理委員会の承認を得て行われた。

「地域医療における薬剤師の役割」講演会に関するアンケート

本日は、日本社会薬学会九州支部・第一薬科大学主催の講演会にご参加頂きありがとうございました。これからも皆様より良い自己研鑽の場となるように、皆様のご意見・ご要望をお伺いし、改善・発展させながら、継続させたいと考えております。以下のアンケートにご協力頂けますようお願いいたします。

※各項目の当てはまるものに○をつけて下さい。

- ・性別 ① 男性 ② 女性
 ・年代 ① 20 歳代 ② 30 歳代 ③ 40 歳代 ④ 50 歳代 ⑤ 60 歳代以上
 ・所属 ① 病院 ② 薬局 ③ 教育機関 ④ その他 ()

1、今回の講演会はどのようにしてお知りになりましたか。

- ① 薬剤師会等からの案内 ② ホームページ ③ 第一薬科大学同窓会の案内
 ④ 知人からのすすめ ⑤ その他 ()

2、講演会は、有意義でしたか。

有意義だった	←	普通	→	有意義でなかった
5	4	3	2	1

3、今回の講演会について、ご意見をお聞かせください。

4、今後、実施して欲しい講演会等のテーマや内容について、ご意見をお聞かせください。

以上、ご協力ありがとうございました。

図 2 自記式質問紙

結果

1 対象者の属性

対象者の属性として、全体の年代構成は、20 歳代 6 名 (9.1%)、30 歳代 20 名 (30.3%)、40 歳代 16 名 (24.2%)、50 歳代 15 名 (22.7%)、60 歳代以上 9 名 (13.6%) であった。

①全体および年代別の性別 [図 3]

全体の性別においては、男性 63.6%、女性 31.8% と、全体の性別の男女比は、2:1 であり、男性の参加割合が大きかった。

年代別の性別においては、20 歳代の男女比が 1:1 であり、30 歳代、40 歳代、50 歳代、60 歳代以上は、男性の参加割合が大きく、特に 40 歳代では男性 75% と割合が他の年代と比較して最も大きかった。

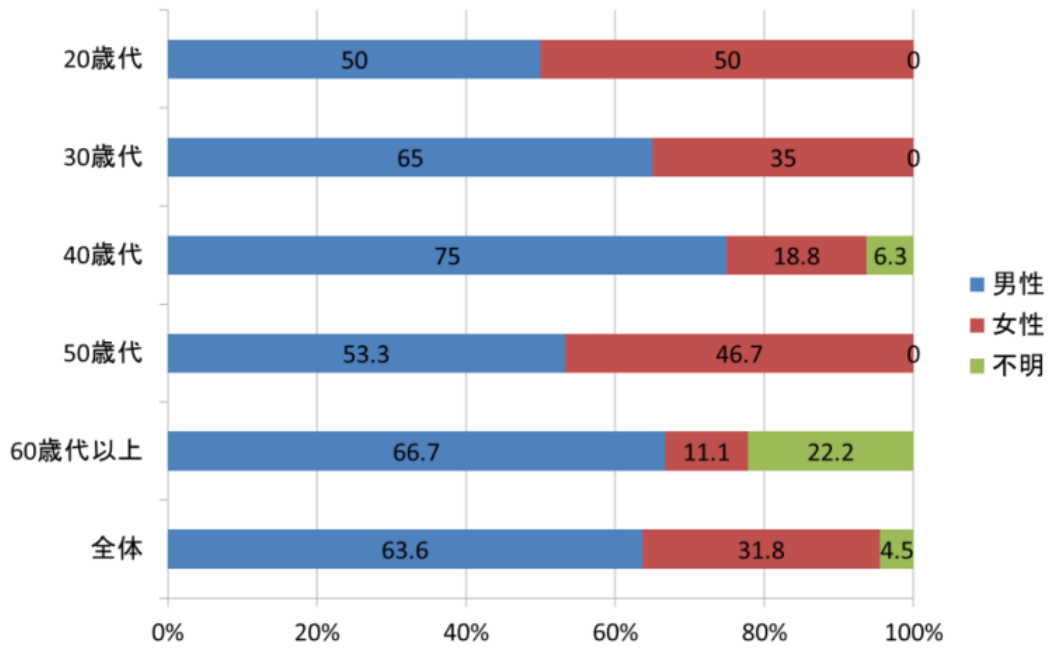


図3 全体および年代別の性別

②全体および年代別の所属[図4]

全体の所属においては、薬局が68.2%、教育機関が13.6%、病院が7.6%であり、薬局所属の参加割合が最も大きかった。

年代別の所属においては、20歳代(83.3%)、30歳代(90%)で、薬局所属の参加割合が最も大きく、20歳代、30歳代共に、病院所属の参加が認められなかった。病院所属の参加が、40歳代(6.3%)、50歳代(26.7%)であり、教育機関所属の参加は、60歳代以上(44.4%)であった。特に、50歳代の所属に、薬局(53.3%)、病院(26.7%)、教育機関(6.7%)、その他(6.7%)と多様性が認められた。

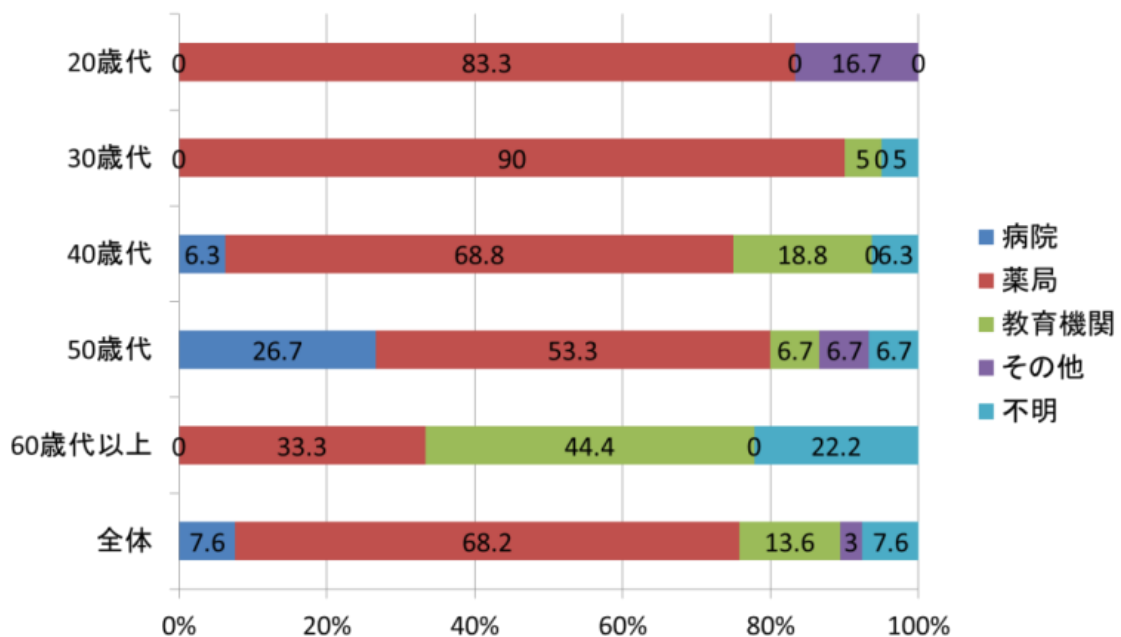


図4 全体および年代別の所属

2 参加経緯

①全体および年代別の参加経緯[図 5]

全体の参加経緯においては、知人からのすすめが 40.9%、薬剤師会等からの案内が 22.7%、その他が 21.2%、ホームページが 10.6%、第一薬科大学同窓会の案内が 3%であり、知人からのすすめの参加経緯割合が、最も大きかった。

年代別の参加経緯においては、20 歳代では、知人からのすすめ(66.7%)の参加経緯割合が最も大きく、ホームページおよび第一薬科大学同窓会の案内は認められなかった。30 歳代では、薬剤師会等からの案内(30%)および知人からのすすめ(30.0%)の参加経緯割合が同じで最も大きく、20 歳代と同様に第一薬科大学同窓会の案内は認められなかった。40 歳代では、知人からのすすめ(56.3%)の参加経緯割合が最も大きく、薬剤師会等からの案内(12.5%)、ホームページ(6.3%)、第一薬科大学同窓会の案内(6.3%)と多様な参加経緯が認められた。50 歳代では、知人からのすすめ(40.0%)の参加経緯割合が最も大きく、第一薬科大学同窓会の案内は認められなかった。60 歳代以上では、40 歳代と同様に、多様な参加経緯が認められ、第一薬科大学同窓会の案内(11.1%)の参加経緯割合が、他の年代と比較して最も大きかった。

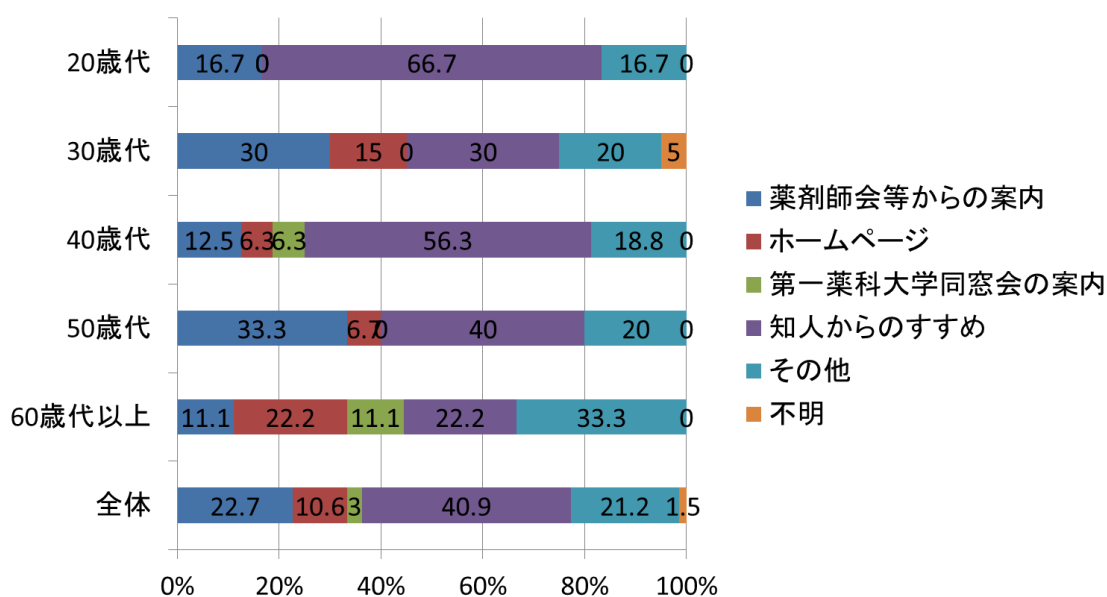


図 5 全体および年代別の参加経緯

②全体および所属別の参加経緯[図 6]

全体の参加経緯においては、2-①と同様である。

所属別の参加経緯においては、病院では、薬剤師会等からの案内(40.0%)および知人からのすすめ(40.0%)の参加経緯割合が同じで最も大きく、ホームページおよび第一薬科大学同窓会の案内の参加経緯は認められなかった。薬局では、知人からのすすめ(40.0%)の参加経緯割合が最も大きく、薬剤師会等からの案内(26.7%)、その他(20.0%)、ホームページ(6.7%)、第一薬科大学同窓会の案内(4.4%)と多様な参加経緯が認められ、所属別において唯一第一薬科大学同窓会の案内の参加経緯が認められた。教育機関では、ホームページ(44.4%)とその他(44.4%)の参加経緯割合が同じで最も大

きかった。その他、不明に関しては、知人からのすすめの参加経緯割合が最も大きかった。

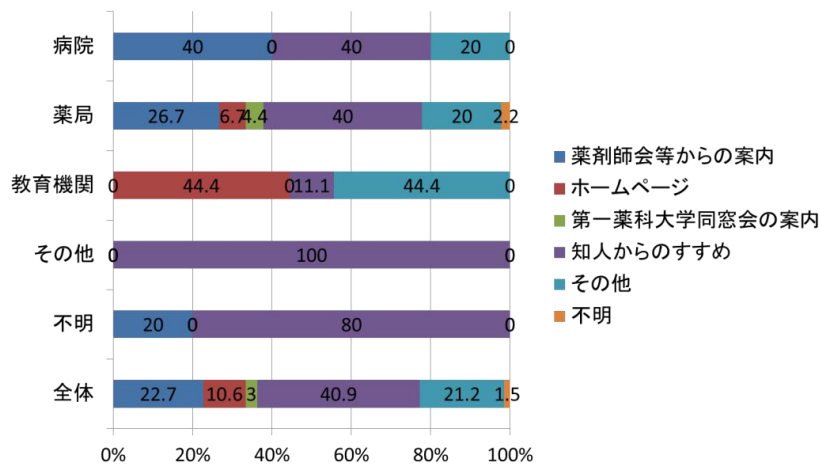


図6 全体および所属別の参加経緯

3 有意義評価

①全体および年代別の有意義評価[図7]

全体の有意義評価においては、有意義だったが72.7%、やや有意義だったが22.7%であった。

年代別の有意義評価においては、20歳代では、やや有意義だった(50%)の有意義評価割合が最も大きく、有意義だった(33.3%)、普通(16.7%)であった。30歳代では、有意義だった(80.0%)の有意義評価割合が最も大きく、やや有意義だった(20%)と合わせると、有意義評価が高かった。40歳代でも、有意義だった(75.0%)の有意義評価割合が最も大きく、やや有意義だった(12.5%)、普通(6.3%)であった。50歳代では、有意義だった(66.7%)の有意義評価割合が最も大きく、やや有意義だった(33.3%)と合わせると、有意義評価が高かった。60歳代以上では、有意義だった(88.9%)の有意義評価割合が最も大きく、他の年代と比較して有意義だったとする割合が最も大きかった。またやや有意義だった(11.1%)と合わせると、有意義評価が高かった。

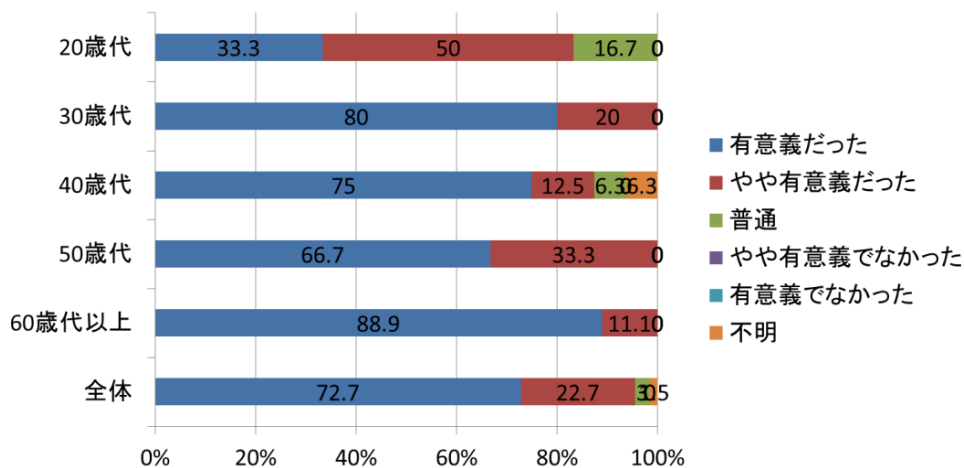


図7 全体および年代別の有意義評価

②全体および所属別の有意義評価[図 8]

全体の有意義評価においては、3-①と同様である。

所属別の有意義評価においては、病院では、有意義だった(60.0%)の有意義評価割合が最も大きく、やや有意義だった(20%)と合わせると、有意義評価が高かった。薬局では、有意義だった(75.6%)の有意義評価割合が最も大きく、やや有意義だった(22.2%)であった。その他では、やや有意義だった(50.0%)、普通(50.0%)であった。不明では、有意義だった(100%)であった。

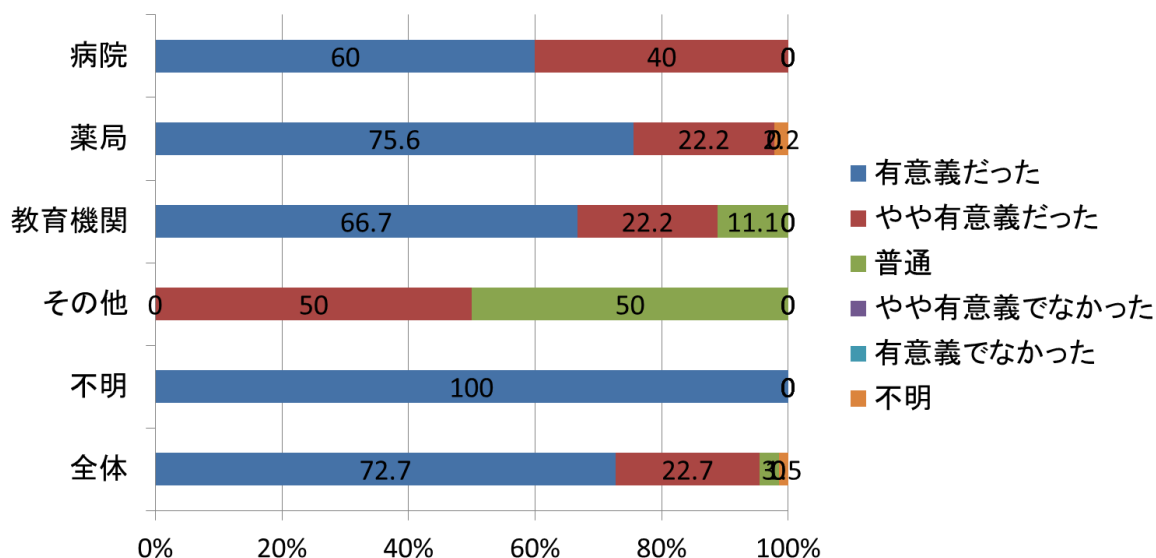


図 8 全体および所属別の有意義評価

4 自由記載

①本講演会の意見

講演会全体の感想を聞いたものであるが、その中で具体的な記載があったものを、下記に一部紹介する。(原文そのまま)

- ・「今までの学術的な講演会ばかりでなく、これから社会から求められるであろう地域に根ざして活動している薬剤師の話を聞いて有意義な講演会でした。(30歳代、男性、所属：薬局)」
- ・「普段の視点にはない話で良かった。(40歳代、男性、所属：薬局)」
- ・「普段行っている業務の方向性が再確認でき、有意義だった。明日から即、役立つ内容で勉強になった。(40歳代、男性、所属：薬局)」
- ・「地域医療に少しでも役立てられる様に今日の講演会を参考にしたいです。又、今自分の行っている指導に自身が持てました。(40歳代、男性、所属：薬局)」
- ・「病院も薬局も垣根を取り払って皆で患者さんを守っていきたいと思いました。今日は超ゴージャスな講師。(40歳代、女性、所属：病院)」
- ・「明日からの服薬指導で、患者さんをみる目が変わったと思う。“生活背景を知ること”“薬剤師として薬理効果、副作用をみる”“目の前の一人の患者のために”など新たな視点を提案していただいたと思う。薬学6年制になって薬局に実習生が来ています。“調剤室で薬をつくるだけが薬剤師ではない”“地域に出ていく”という視点で共

に学んでいますが、本日の講演会は励みになりました。私が、私達が、目指す薬剤師像だと思います。(50歳代、女性、所属：薬局)」

・「地域医療に目を向けること、患者さんを知ることが薬剤師の役割であり、かかりつけ薬局として、患者様とかかわって行くことが大切だという事を感じました。これから何をしないといけないのかという事に気付かされました。(50歳代、女性、所属：不明)」

②今後の講演会希望テーマについての意見

具体的な記載があったものを、下記にすべてを紹介する。

- ・今日のような臨床の現場をフィードバックしていただけるような勉強会(20歳代、男性、所属：薬局)
- ・患者に対する食品(カロリー等)についてのアドバイス(30歳代、男性、所属：薬局)
- ・学校薬剤師。各薬局で取り組んでいる地域医療の事例報告(例：公民館での講演や薬局に地元患者を招いて健康講座、在宅での取り組みなど)。(30歳代、男性、所属：薬局)
- ・地域医療(30歳代、男性、所属：薬局)
- ・電子薬歴(30歳代、男性、所属：薬局)
- ・在宅(30歳代、男性、所属：薬局)
- ・病院内での化学療法状況(30歳代、男性、所属：不明)
- ・地域医療とOTCを含めたセルフケア(セルフメディケーション、衣食住のケア等)について。多職種の方から見た「外来・在宅の実際」と「薬剤師に求めること」(30歳代、男性、所属：薬局)
- ・多職種連携までのアプローチ等(30歳代、男性、所属：薬局)
- ・TDM、衛生、分析化学、薬物動態学(30歳代、女性、所属：薬局)
- ・健康食品(40歳代、男性、所属：薬局)
- ・医療経済(40歳代、男性、所属：薬局)
- ・保険、残薬、社会貢献、経済性、GE、アドヒアランス(40歳代、男性、所属：薬局)
- ・薬物動態からのAEのアセスメント(40歳代、不明、所属：不明)
- ・薬剤性認知機能低下の実例と対処法。院内処方での服薬から副作用が疑われる時、地域の薬剤師はどう対処すべきか？(50歳代、女性、所属：医薬品卸売)
- ・在宅医療についての経験(50歳代、女性、所属：不明)
- ・ヘルスアセスメント(フィジカルアセスメントを含む)の各論について、もう少し深く掘り下げたテーマ(60歳代以上、男性、所属：教育機関)

考察

本研究の目的は、本講演会参加者(学生を除く)を対象に、「平成25年度 日本社会薬学会九州支部設立記念講演会・第一薬科大学薬剤師生涯学習講演会」に関してアンケート調査を実施し、解析することによって、今後の第一薬科大学生涯学習講演会並びに支部講演会開催の基礎資料とすることであった。

1 対象者の属性

対象者の属性として、全体の性別の男女比は、2:1 であり、男性の参加割合が大きかった。年代別の性別においては、20 歳代の男女比が 1:1 であったが、特に 40 歳代では男性 75%と割合が大きかった。これは、30 歳、40 歳代の女性の割合が小さくなることから仕事以外に子育て世代の影響があるものと考えられ、女性のライフサイクルも考慮する必要があるかもしれない。平成 24 年「医師・歯科医師・薬剤師調査」(厚生労働省)⁵⁾によると、「施設・業務の種別にみた薬剤師数」の構成割合は、男性 39.0%、女性 61.0%と女性が多いにも関わらず、生涯学習である本講演会の女性の参加割合は、男女比 2:1 と小さく、今後、女性薬剤師の生涯学習に対する意欲の向上が必要と考えられた。

2 参加経緯

参加経緯において、全体では、「知人からのすすめ」の割合が最も大きく、次いで、「薬剤師会等からの案内」、「その他」、「ホームページ」、「第一薬科大学同窓会の案内」の順であった。

世代別では、いずれの世代も「知人からのすすめ」の割合が最も大きく、40 歳代と 60 歳代以上では、「知人からのすすめ」・「薬剤師会等からの案内」、「ホームページ」、「第一薬科大学同窓会の案内」と多様な参加経緯が認められ、20 歳代、30 歳代といった若い年代と比べて、様々なネットワークを持つことがうかがわれた。

所属別では、病院においては、「ホームページ」・「同窓会の案内」の活用がなく、教育機関においては、「薬剤師会等からの案内」・「同窓会の案内」の活用が認められなかった。また薬局においては、「知人からのすすめ」・「薬剤師会等からの案内」・「ホームページ」・「同窓会の案内」と多様な参加経緯が認められ、所属別において唯一「同窓会の案内」の参加経緯が認められた。これは、薬局外から積極的に情報収集することがうかがわれ、薬局においては、他の所属よりも情報を共有する機会を外部に求めており、同窓会も含めたネットワークを活用する姿勢と考えられた。

参加経緯において、世代別、所属別共に、参加経緯として“活用されていない手段”が認められ、それらの活用の方策が、所属別の有効なアプローチになりうることをうかがわれた。

3 有意義評価

全体の有意義評価において、「有意義だった」と評価したものが 72.7%、「やや有意義だった」と評価したものが 22.7%であり、9 割以上が、本講演会を有意義なものとして評価していた。

年代別では、30 代以上の経験年数の多い年代に有意義評価が高く、これは、講演内容が経験年数の多い薬剤師にとっても関心のあるテーマであったことがうかがえた。

所属別では、薬局(75.6%)、教育機関(66.7%)、病院(60.0%)の順に、有意義度の評価が高かった。今回の講演会テーマが「地域医療における薬剤師の役割」ということで、講演内容が、薬局薬剤師の日常業務における現場での課題(在宅医療、こそだて医療、ハイリスク薬等)が多く含まれ、薬局所属の有意義評価も高くなったと考えられた。

4 自由記載

①本講演会の意見

参加者にとって、本講演会は、地域医療を実践している演者から、日常業務にすぐに役立つ知識に加え、地域とのかかわりや薬剤師としてのあり方や経験も含めて学べたことにより、演者を薬剤師のロールモデルとしてとらえ、参加者自身の日常業務の確認やモチベーションの向上として、役立ったと考えられた。

②今後の講演会希望テーマについての意見

今後の講演会希望テーマとして、「地域医療」に関するもので、“在宅医療”、“多職種連携”、“健康食品”、“学校薬剤師”、“医療経済”、“OTC医薬品”、“ジェネリック医薬品”等、日常業務での課題があげられていた。中でも、“在宅医療”においては、薬剤性認知機能低下の実例と対処法や経験等を知りたい要望があった。さらに“在宅医療”に限らず、各薬局で取り組んでいる地域医療の事例報告を知りたい要望があり、事例もふまえたレベルの高い講演会内容を求めていると考えられた。

他には、“電子薬歴”、“化学療法”、“保険”、“残薬”、“アドヒアランス”、“薬物動態のアセスメント”等、様々なテーマがあげられていた。

希望テーマは、各年代、各所属によって、様々であるが、参加者の日常業務における現場での課題について、それぞれの立場にフィードバック出来る講演会テーマを、いずれの参加者も希望していると考えられた。

結論

本講演会は、「地域医療における薬剤師の役割」をテーマに開催したが、講演会アンケート回答者の9割以上が、本講演会を有意義なものとして評価していた。生涯学習である本講演会の女性の参加割合は、男女比2:1と小さく、今後、女性薬剤師の生涯学習に対する意欲の向上が必要と考えられた。参加経緯において、所属別では、参加経緯として“活用されていない手段”が認められ、それらの活用の方策が、所属別の有効なアプローチになりうることが示唆された。今後も、大学が提供する薬剤師生涯学習として、学会支部も含めた関係機関と連携しながら、地域のより良い自己研鑽の場となるように、薬剤師のニーズに応じたテーマで、講演会を継続させていきたいと考える。

謝辞

本講演会の開催にあたり、座長の和田光弘先生(長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科 准教授)、川野愛先生(川野薬館 薬剤師)をはじめ、ご協力いただきましたすべての皆様に深謝いたします。

引用文献

1) 公益社団法人 日本薬剤師会, 薬剤師倫理規定

<http://www.nichiyaku.or.jp/?p=11713>

(2013年12月15日アクセス可能)

2) 公益社団法人 日本薬剤師会, 生涯学習支援システム「JPALS」がスタート!

<http://www.nichiyaku.or.jp/?p=19053>

(2013年12月15日アクセス可能)

- 3) 日本社会薬学会,
<http://shayaku.umin.jp/index.html>
(2013年12月15日アクセス可能)
- 4) 日本社会薬学会, 九州支部
<http://shayaku.umin.jp/about/kyushu/index.html>
(2013年12月15日アクセス可能)
- 5) 厚生労働省, 平成24年(2012)医師・歯科医師・薬剤師調査の概況 結果の概要
3 薬剤師
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/ishi/12/dl/kekka_3.pdf
(2013年12月15日アクセス可能)

付属資料

資料1 講演会プログラム

**平成25年度 日本社会薬学会九州支部設立記念講演会
第一薬科大学薬剤師生涯学習講演会**

「地域医療における薬剤師の役割」

日 時 ▶ 平成25年7月7日(日) 13:00~16:20
会 場 ▶ 第一薬科大学 新館2階 S22
参加費 ▶ 無料(事前申込不要)
共 催 ▶ 日本薬剤師研修センター(2単位・受付番号 G01-2013-L-02830)

<プログラム>

13:00-13:05 開会の挨拶
吉武 毅人 (第一薬科大学副学長・日本社会薬学会九州支部事務局長)

13:05-13:15 日本社会薬学会会長挨拶
宮本 法子 (日本社会薬学会会長・
東京薬科大学薬学部 社会薬学研究室 教授)

13:15-13:20 日本社会薬学会九州支部設立記念挨拶
入江 徹美 (日本社会薬学会九州支部支部長・
熊本大学大学院 生命科学研究部 薬剤情報分析学分野 教授)

座長: 和田 光弘 先生 (長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科 准教授)
川野 愛 先生 (川野薬館薬剤師)

13:20-14:05

講演1 「在宅医療に求められる
ヘルスアセスメントとフィジカルアセスメントの考え方と薬剤師の役割」
川添 哲嗣 先生 (くろしお薬局 代表取締役副社長)

14:05-14:50

講演2 「地域医療における薬剤師の役割～NPOの活動事例から～」
中村 守男 先生 (NPO法人 こどもとくすり 理事長・薬剤師)

14:50-15:00 休 憩

15:00-15:45

講演3 「ハイリスク薬投与患者のフィジカルアセスメント」
神村 英利 先生 (福岡大学薬学部 教授・筑紫病院薬剤部長)

15:45-16:15 総合討論

16:15-16:20 閉会の挨拶
原 千高 (第一薬科大学学部長)

主催: 日本社会薬学会九州支部、第一薬科大学 後援: 福岡県薬剤師会、福岡県病院薬剤師会、福岡市薬剤師会

資料2 発表抄録

【講演1】

「在宅医療に求められるヘルスアセスメントとフィジカルアセスメントの考え方と薬剤師の役割」

講師：川添 哲嗣 先生（くろしお薬局 代表取締役副社長）

昨今、フィジカルアセスメントやバイタルサインチェックという言葉があちらこちらで聞かれるようになった。今回、それらの言葉の意味と位置づけをきちんと整理し、在宅医療はもちろんのことながら地域医療において薬剤師がアセスメントするべきものとその手法を整理してお伝えしたい。

（内容 INDEX）

- 1 / 地域医療や在宅医療における薬剤師の役割 3 Steps
- 2 / 服薬支援の考え方
- 3 / 患者への関わり方
 - ① トータルヘルスアセスメント（身体、心理、社会）を考慮することが重要
 - ② フィジカルアセスメントとは何か～主観的情報と客観的情報～
 - ③ バイタルサインチェックとフィジカルイグザミネーション
 - ④ 薬学的なフィジカルアセスメントの具体的な手法～5 5 5 チェック～
 - 1) 5感を使ったチェック
 - 2) 5領域（食事、排泄、睡眠、運動、認知機能）のチェック
 - 3) 5つのバイタルサインのチェック
- 4 / まとめ

日常の業務の中でも薬剤師ができることは実は多くある。身体状況だけでなく、心理因子や社会因子も踏まえたトータルヘルスアセスメントができる薬剤師が増えることを願ってやまない。

●略歴

‘90年 神戸学院大学薬学部卒業、‘90～94年 ニチバン株式会社

‘94～95年 服部病院 ’96～98年 JA 高知病院

‘98年～ くろしお薬局グループ創設、現在に至る

所属学会、研究会

日本緩和医療薬学会、全国薬剤師・在宅療養支援連絡会（J-HOP）

日本在宅薬学会、HIP 研究会

役 職

（有）くろしお薬局 代表取締役副社長 、高知県薬剤師会理事

日本薬剤師会 地域・在宅医療委員会および広報委員会委員

全国薬剤師・在宅療養支援連絡会副会長

【講演 2】

「地域医療における薬剤師の役割～NPO の活動事例から～」

講師： 中村 守男 先生 (NPO 法人 こどもとくすり 理事長／薬剤師)

少子高齢社会における現代の医学・医療に対する社会的ニーズは、疾病治療だけでなく、人が健康で幸せな毎日を送るために、といった生活の質 (QOL) を重視する視点、ケアを含めた地域医療の視点が不可欠になっている。

薬剤師においては、フィジカルアセスメントやバイタルサインのチェックなども行われ始めるなど、地域医療現場における薬剤師の役割やニーズも大きく変化している。我々薬剤師は、地域住民の健康維持・増進を目的として、地域の医療機関・行政・住民・企業などが連携して取り組む総合的な医療・健康づくりの大切な一員として、病気治療に携わるだけでなく、予防や病後のケア、介護、育児支援など幅広い分野に関わる存在となってきたと考える。

NPO 法人こどもとくすり (福岡市、理事長中村守男) では、会員の薬剤師、歯科医師、管理栄養士、心理カウンセラーなどを中心に、「健康づくり講座」を企画。会員以外のどなたにも参加してもらえる形で開催している。そうしたなか、参加者 (主に母親) からは、「子どもの夜泣きと授乳の関係は？」とか、「子どもの湿疹は皮膚科、小児科、どちらに行くべきか？」など、決して医療の現場では上がってこないような疑問、質問が多く見受けられる。

NPO 法人こどもとくすりの活動事例を紹介するとともに、これからの「地域医療」における薬剤師の役割について発表したい。

●略歴

NPO 法人こどもとくすり理事長／薬剤師

薬剤師として調剤薬局で小児医療に携わりながら、2006 年「子どもの薬を考える会」を立ち上げ、それを母体に 2009 年「NPO 法人こどもとくすり」を設立。生活者目線を大事に、『こそだて医療』(=医療と健康の面から子育てを支援)を推進するとともに、医療の立場から“健康子育て”支援を目的に、健康づくり講座やワークショップ、講演活動を行う。また、九州大学を中心とする「こども×くすり×デザイン実行委員会」のメンバーとして「こどもおくすり手帳『けんこうキッズ』」を開発。現在、NPO 法人こどもとくすりで販売、全国の病院、薬局で取り扱われ、子どもの健康づくりに活用できる手帳として、厚労省が 2012 年設置した「アフターサービス推進室」の活動報告書でも紹介される。

有限会社八幡西調剤薬局マネージャー。2 児の父親。

※NPO 法人こどもとくすり公式ホームページ <http://kodomo-kusuri.org/>

※公式 facebook ページ <http://www.facebook.com/kodomokusuri>

【講演3】

「ハイリスク薬投与患者のフィジカルアセスメント」

講師： 神村 英利 先生（福岡大学薬学部教授・筑紫病院薬剤部長）

ハイリスク薬とは、診療報酬および調剤報酬制度において、特に安全管理が必要な薬物として指定されているもので、抗悪性腫瘍剤、血液凝固阻止剤、免疫抑制剤などが含まれる。これらの薬効群は過剰投与により、重篤な副作用を引き起こし、過少投与により、原疾患の再発や増悪を招き、いずれにしても患者に重大な転帰をもたらす。しかも、がん、心血管系疾患、関節リウマチなどの治療が長期に及ぶ疾患に使用され、急性期は医療機関、慢性期は薬局で薬学的管理を行うことが多く、薬薬連携が重要な鍵を握る薬効群でもある。

現在、医薬品の適正使用と安全管理の観点から、薬剤師には患者のフィジカルデータをアセスメントして処方に反映させる能力が求められている。とりわけ、ハイリスク薬が投与されている患者のフィジカルアセスメントは有効かつ安全な薬物療法を提供するために不可欠である。そこで、本講演ではハイリスク薬の重大な副作用（無顆粒球症や致死性の皮膚粘膜障害など）を早期発見するためのフィジカルアセスメントのポイントを概説する。また、シームレスな薬学的管理を目指して、福岡大学筑紫病院と筑紫薬剤師会並びに近隣薬局との連携の状況、ハイリスク薬に関する研修の内容についても紹介する。

●略歴

昭和 36 年 1 月 山口県萩市出身
昭和 59 年 3 月 福岡大学薬学部卒業
平成元年 3 月 九州大学大学院薬学研究科博士課程修了
平成元年 4 月 (株) パナファーム・ラボラトリーズ入社
平成 2 年 4 月 (株) パナファーム・ラボラトリーズ 臨床検査室長
平成 4 年 4 月 (株) パナファーム・ラボラトリーズ 薬物代謝試験室長
平成 5 年 4 月 (医) 井上会 篠栗病院入社
平成 5 年 7 月 (医) 井上会 篠栗病院 薬剤室長
平成 16 年 4 月 福岡大学薬学部 助教授・筑紫病院 薬剤部長
平成 19 年 12 月 福岡大学筑紫病院 臨床研究支援センター長
平成 20 年 4 月 福岡大学薬学部 教授
(筑紫病院 薬剤部長・臨床研究支援センター長兼任)

現在に至る